

# 目次

1. 著者が執筆前に編集委員に提出したコンセプトペーパー ..... P.03
2. 編集委員によるコンセプトペーパーに対するコメント ..... P.06
3. コメントを受けて著者が再考した後に提出された論考初稿 ..... P.11
4. 『といとうとい』 Vol.0に掲載された論考 ..... P.15
5. 『といとうとい』 Vol.0に掲載された編集委員との対話 ..... P.21
6. 『といとうとい』 Vol.0に掲載された編集委員による解題 ..... P.23

目次内のページ番号は、本PDFにおけるページ番号をさす

# 戦う言葉

—消滅危機言語の研究と実践—

山田 真寛 国立国語研究所 言語変異研究領域

横山 晶子 東京外国語大学 アジアアフリカ言語文化研究所

現在、6000から8000あるとされる世界の言語は、その半分以上が「いま何もしなければ」今世紀中になくなってしまうとされています。UNESCO の報告によると、そのような「消滅危機言語」が日本には8つあるとされていますが、島や集落ごとに異なるこれらの言語の下位方言を含めると、より膨大な言語が危機にさらされていると言えます。

直ちに気づくように「消滅危機言語」という単語においては、すでに価値感が含まれています。すなわち、消滅はよくないという前提があるということです。とある野生動物が絶滅寸前であると耳にすれば自ずと保護意識が芽生えるように、この消滅危機言語もまた保全されるべき、調査されるべき対象です、と言い切れればいいのですが、ことはより複雑です。

そもそも言語とは何でしょうか。「言語とは、完全なるコミュニケーション・ツールである」と断言するのはあまりに安易です。言語をまだ持たない赤子と母親の身体的接触を通じた密な意思疎通可能の事実、さらには長年連れ添った夫婦が目線や吐息で意思疎通できる事実。これらは言語によらずともコミュニケーションができる明らかな証拠ですし、むしろ言語よりも的確な情報伝達となっているとも言えます（ただしかなり濃い対一関係に限定される）。

もちろん、言語は他者とのやりとりの一つであることは疑いようはありませんが、少し考えてみるならば、我々は言語（言葉）なしには何一つ考えることはできない存在であると気づきます。いやいや、「思う」や「感じる」は言語以前のものじゃないかと思われた方もいるかと思いますが、心に何かそのようなものが湧いたとき・・・それを言葉にすることで意識下とし、自分自身でその何かを自覚するというのは我々にとってごく自然な行為でしょう。つまり、言葉にしてはじめて詳らかになるということです、やはり言葉なしには何一つ考えられない、となるのです。

ここで大事なものは三つ。一に、間違いなく言葉以前の何かの存在を認めていること（意味の存在）、二に、言葉にしたものが言葉以前の何かと一義的に確定しえないこと（言葉の限界）、三に、一何よりこの三が一番大事なのですが— その言葉とは人間が意図して作ろうとして作った人工物ではなく、自然ないしは宇宙的な独自の存在である、という点です（普遍の証拠）。原始において言語というものは偶発的に生まれ、またそして偶発的に共同体を

作り、その共同体により生きながらえてきました。胎児の段階からすでにその言語のシャワーを浴び、誕生後その成長に伴い空気のように自ずとその言語を使用してきた・・・言うまでもなく言語は身体的な存在であり、同意にて、身体は言語的な存在であるのです。

これは呑気に聞き流されるものではなく、別視点で言うなら、その言語共同体に生まれ落ちた身体は強制的にその言語の正しさのもとに在り、そこから抜け出すことは許されない。そのぐらい我々を支配しているものと言えます。

ようやく本題に踏み込みますが、ここで言語を「方言」と置き換えても成り立つことに意識を向けたいのです。上でも書いたように、消滅危機言語の研究は、絶滅危惧種保護と同じような多様性の確保や人間理解の手段喪失といった文脈で意味づけられることが多いですが、あえて「方言」の側から考えてみるなら、有限な身体になんとか息継いで無限たろうと言語が戦う営みに力を貸すこと、とも言えます。つまり、著者らは10年にわたり与那国島や沖永良部島をベースにその方言を継承する活動をやってきましたが（島でのワークショップや数多くのイベント、教育委員会との連携や絵本作りなど：参考文献リスト参照）、ある意味で「方言」が我々を動かしたとも言えるのです。

事実、その活動を通じて著者らが感じたのは、その方言がどんなに面白い現象に溢れているか、いかに価値ある言語なのか、ということ。数ある例から一つ選出するなら、沖永良部島のオノマトペ(擬音語・擬態語)では、「怒る」に「わじわじ(怒る)」、「柔らか」に「びらびら(柔らか)」等があります。加えて、与那国島のこのことわざ、

むぬいばちたや、ちまばちるん。ちまばちたや、うやばちるん。  
“ことば忘れれば、島忘れる。島忘れれば、親忘れる。”

方言は単なる個々人のアイデンティティにとどまらず、それを使用する共同体とその歴史といった、個々人を越えた域での存在を感じさせてくれるものです。先に、言語は身体化され、身体は言語化されていると書きましたが、こと方言においては使用者からなる共同体の輪郭が明瞭なぶんだけ、より身体化が強化され、同時に、同じ共同体の身体同士との関係も強固なものになるのでしょう。そこに実在として在る普遍は、残されなければならない対象などではなく、価値そのものなのです。したがって、消滅危機を回避することが本当の目的ではなく、むしろ消滅危機を回避しようとする努力こそに意味がある、、、人間はどうせ死ぬのに生きようと生きているのと同じことです。

消滅危機言語の研究は、その終わりが具体になりつつあるという点において、通常の言語研究よりもいづれより強く普遍を意識させてくれます。もちろん、著者らも最初は学術研究としてフィールドに体入り、研究対象として方言と接してきた過去をもちます。しかし、言語研究、特に消滅危機言語研究というものが持つその特性は、人間あるいは歴史としての本質に迫るゆえ、学術的成果を収めることで満足することを許しません。方言(言語)とい

う一つの宇宙を扱うためには、人と人との付き合い、人生の重なりこそがふさわしい、と思うようになったのです。

学術研究は、研究者個人の「わからないことを知りたい」という気持ちを動機にして進められ、それが自分一人で紙とペンだけで達成できるなら、社会と直接関わる必要はないかもしれません。また、学術研究の社会還元は、わかったことを専門家向けの論文などのかたちで発表することで、間接的に成しうることもかもしれません。ただ、理論言語学における厳密な[ʔ](「っ」と喉を詰めるような音)や[ji](ヤ行のイ段の音)の違いを突き詰める知識もさることながら、対象と観察者を区別しないような、言語そのものの生きた状態を扱う(研究する)ためにこそ、我々も生きた研究者にならなければならない。そう考えています。

(2574字)

参考文献：

言語復興の港：<https://plrminato.wixsite.com/webminato>

しまむに宝箱：<https://www.erabumuni.com/>

絵本クラウドファンディング：<https://readyfor.jp/projects/minato>

他は、各著者のリサーチマップに詳しい

- ・山田 真寛 国立国語研究所 <https://researchmap.jp/MasahiroYamada>
- ・横山晶子 東京外国語大学 <https://researchmap.jp/akikoyokoyama>

## 1. SHINTARO FURUYA

2021年1月27日 16:21:54

つまり、の前に、ソシュールの言語学の解説があると、読者にソシュールってそういうことだったのか！という発見を与えると同時に、より本論に引き込むことができると思います。

ギリシア哲学のアイデアやロゴス、中世の唯名論、近代～現代の認識論（とくにカント）、数学基礎論（ヒルベルトプログラム）、科学/言語哲学における感覚与件（論理実証主義）、ヴィトゲンシュタインの言語哲学やサピア=ウォーフ仮説など、話したいことはやまやまで、どこから始めどこで切るかというのは悩ましいと思います。が、少なくとも書いている部分でこれまでの学問のどこに対応しているかを解説頂くと（紙幅の限りもありますが）、学問の奥深さを伝えられるのではと思います。

## 2. 宮野公樹

2021年2月12日 1:38:30

サピア=ウォーフ仮説

## 3. SHINTARO FURUYA

2021年1月27日 16:30:06

言語が生まれた原因と過程について、どのような研究がありますか？かなり明確に書いてらっしゃるので、何か根拠があるのが気になるります。

## 4. 宮野公樹

2021年2月12日 1:33:57

進化言語学

# 戦う言葉

ー消滅危機言語の研究と実践ー

山田 真寛 国立国語研究所 言語変異研究領域

横山 晶子 東京外国語大学 アジアアフリカ言語文化研究所

現在、6000から8000あるとされる世界の言語は、その半分が「いま何もしなければ」今世紀中にはなくなってしまうと言われていています。UNESCO の報告によると、そのような「消滅危機言語」が日本には8つあるとされていますが、島や集落ごとに異なるこれらの言語の下位方言を含めると、より膨大な言語が危機にさらされていると言えます。

直ちに気づくように「消滅危機言語」という単語においては、すでに価値感が含まれています。すなわち、消滅はよくないという前提があるということです。とある野生動物が絶滅寸前であると耳にすれば自ずと保護意識が芽生えるように、この消滅危機言語もまた保全されるべき、調査されるべき対象です、と言い切れればいいのですが、ことはより複雑です。

そもそも言語とは何でしょうか。「言語とは、完全なるコミュニケーション・ツールである」と断言するのはあまりに安易です。言語をまだ持たない赤子と母親の身体的接触を通じた密な意思疎通可能な事実、さらには長年連れ添った夫婦が目線や吐息で意思疎通できる事実。これらは言語によらずともコミュニケーションができる明らかな証拠ですし、むしろ言語よりも的確な情報伝達となっているとも言えます（ただしかなり濃い一対一関係に限定される）。

もちろん、言語は他者とのやりとりの一つであることは疑いようはありませんが、少し考えてみるならば、我々は言語（言葉）なしには何一つ考えることはできない存在であると気づきます。いやいや、「思う」や「感じる」は言語以前のものじゃないかと思われた方もいるかと思いますが、心に何かそのようなものが湧いたとき・・・それを言葉にすることで意識下とし、自分自身でその何かを自覚するというのは我々にとってごく自然な行為でし

1 2 う。つまり、言葉にしてはじめて詳らかになるということですので、やはり言葉なしには何一つ考えられない、となるのです。

ここで大事なことは三つ。一に、間違いなく言葉以前の何かの存在を認めていること（意味の存在）、二に、言葉にしたものが言葉以前の何かと一義的に確定しえないこと（言葉の限界）、三に、一何よりこの三が一番大事なのですが一 その言葉とは人間が意図して作ろう

3 4 として作った人工物ではなく、自然ないしは宇宙的な独自の存在である、という点です（普遍的証拠）。原始において言語というものは偶発的に生まれ、またそして偶発的に共同体を

## 5. Rusudan KEVKHISHVILI

2021年1月24日 7:03:09

ここで、母国語と母国語以外の言語の習得に言及することは良いと思います。

## 6. SHINTARO FURUYA

2021年1月27日 16:34:30

ここについては、言語＝認識の相対性を前提とすると理解できないのですが、KEVKHISHVILIさんが指摘しているように、多言語話者の認識がどうなっているのか？というのはまだ明確な答えがないように思います。

Lost in translationというのは、単に異なる言語が一対一対応しないということであって、各言語が我々をどのように支配しているかどうかは（とくに多言語話者の場合）話が別だと思うのです。

## 7. SHINTARO FURUYA

2021年1月27日 16:50:04

学問的な寄り添い方、言語に対する向き合い方に、とても感銘を受けました。と、同時にタイトルが腑に落ちました。

## 8. 宮野公樹

2021年1月20日 4:14:30

島の人達との交流の中で、学問（ないしは言語の宇宙、普遍性）を感じるシーンがあれば、足してもいいかもしれませんね。

## 9. Rusudan KEVKHISHVILI

2021年1月24日 7:25:38

自然や気持ちを表す表現の中に、他の言語にない、代替不可能な表現も多いと思います。言語消滅の場合、このような表現は失われてしまいます。この点（訳すことが難しい表現等）は言語の価値として重要なポイントだと思います。方言承継活動の中で現れた、このような表現の例を挙げると、消滅を回避することの意味を別の観点からも伝えることが出来ると思います。

作り、その共同体により生きながらえてきました。胎児の段階からすでにしてその言語のシャワーを浴び、誕生後その成長に伴い空気のように自ずとその言語を使用してきた・・・言うまでもなく言語は身体的な存在であり、同意にて、身体は言語的な存在であるのです。

これは呑気に聞き流されるものではなく、別視点で言うなら、その言語共同体に生まれ落ちた身体は強制的にその言語の正しさのもとに在り、そこから抜け出すことは許されない。そのぐらい我々を支配しているものと言えます。

ようやく本題に踏み込みますが、ここで言語を「方言」と置き換えても成り立つことに意識を向けたいのです。上でも書いたように、消滅危機言語の研究は、絶滅危惧種保護と同じような多様性の確保や人間理解の手段喪失といった文脈で意味づけられることが多いです

が、あえて「方言」の側から考えてみるなら、有限な身体になんとか息継いで無限たろうと言語が戦う営みに力を貸すこと、とも言えます。つまり、著者らは10年にわたり与那国島や沖永良部島をベースにその方言を継承する活動をやってきましたが（島でのワークショップや数多くのイベント、教育委員会との連携や絵本作りなど：参考文献リスト参照）、ある意味で「方言」が我々を動かしたとも言えるのです。

事実、その活動を通じて著者らが感じたのは、その方言がどんなに面白い現象に溢れているか、いかに価値ある言語なのか、ということ。数ある例から一つ選出するなら、沖永良部島のオノマトペ(擬音語・擬態語)では、「怒る」に「わじわじ(怒る)」、「柔らか」に「びらびら(柔らか)」等があります。加えて、与那国島のこのことわざ、

むぬいばちたや、ちまばちるん。ちまばちたや、うやばちるん。  
“ことば忘れれば、島忘れる。島忘れれば、親忘れる。”

方言は単なる個々人のアイデンティティにとどまらず、それを使用する共同体とその歴史といった、個々人を越えた域での存在を感じさせてくれるものです。先に、言語は身体化され、身体は言語化されていると書きましたが、こと方言においては使用者からなる共同体の輪郭が明瞭なぶんだけ、より身体化が強化され、同時に、同じ共同体の身体同士との関係も強固なものになるのでしょう。そこに実在として在る普遍は、残されなければならない対象などではなく、価値そのものなのです。したがって、消滅危機を回避することが本当の目的ではなく、むしろ消滅危機を回避しようとする努力こそに意味がある、、、人間はどうせ死ぬのに生きようと生きているのと同じことです。

消滅危機言語の研究は、その終わりが具体になりつつあるという点において、通常の言語研究よりもいくらかより強く普遍を意識させてくれます。もちろん、著者らも最初は学術研究としてフィールドに体入り、研究対象として方言と接してきた過去をもちます。しかし、言語研究、特に消滅危機言語研究というものが持つその特性は、人間あるいは歴史としての本質に迫るゆえ、学術的成果を収めることで満足することを許しません。方言（言語）とい

## 10. 東原紘道

2021年1月27日 1:52:55

@著者の思いは伝わってきます。会話したい問題も確認の必要な言葉使いも多いです。ただし以下は今後に向けてのコメントです。著者には思い入れがあります。これは活動の原点であり、エネルギーの出処でもあって、大切なものです。一方で、一面的な思考に誘い込む罠にもなりえます。つまり、思い入れの存在、という事実はproblematiqueであり貴重なリソースです。貴方の思い入れにこだわり観察・思考してください。貴方は既に参加者です。研究の重要な柱の一つになると期待します。多くの文化人類学者が、“対象と観察者を区別しないような”との方向づけ・願望を表明しており、それはもっともなことですが、実現が難しいことも事実です。著者に向かい合っているものは、言葉や生活や環境などなどの多様な複合体で、言葉と人間はこれらの環境を反映しています。その辺りも描き出されると、読み手の世界も広がります。

## 11. Rusudan KEVKHISHVILI

2021年1月24日 7:48:53

言語を承継する活動は島の人々にとってどのような影響を与えましたか？自分のアイデンティティを忘れないことは良い精神状態を保つことに密接に関連していると思います。この観点から考えると、消滅危機言語の研究の社会還元は多くの人々の生活の質の改善でもあると言っていいでしょうか。

10 う一つの宇宙を扱うためには、人と人の付き合い、人生の重なりこそがふさわしい、と思うようになったのです。

11 学術研究は、研究者個人の「わからないことを知りたい」という気持ちを動機にして進められ、それが自分一人で紙とペンだけで達成できるなら、社会と直接関わる必要はないかもしれません。また、学術研究の社会還元は、わかったことを専門家向けの論文などのかたちで発表することで、間接的に成しうることもかもしれません。ただ、理論言語学における厳密な[ʔ]（「っ」と喉を詰めるような音）や[ji]（ヤ行のイ段の音）の違いを突き詰める知識もさることながら、対象と観察者を区別しないような、言語そのものの生きた状態を扱う（研究する）ためにこそ、我々も生きた研究者にならなければならない。そう考えています。（2574字）

参考文献：

言語復興の港：<https://plrminato.wixsite.com/webminato>

しまむに宝箱：<https://www.erabumuni.com/>

絵本クラウドファンディング：<https://readyfor.jp/projects/minato>

・コンセプトペーパー全体に対するコメント

野原佳代子（東京工業大学 環境・社会理工学院 教授）

消滅危機言語研究が、記述的、科学的側面を持つと同時に、関与者らがともに生きるべきだとする点に、深く賛同を覚えます。近年、前者に重点が置かれ過ぎたために、言語現象を「自分」ごと、「共同体」ごと、「人間」ごととしてとらえる視座が失われ、多くの言語研究が無機質な調査に終わっている感があり残念です。

調査対象、被験者はデータ精製機ではない。彼らと調査グループが深く関わることで表出するもの、有機的に生成される生き生きとしたものがあるのだろうと推測しています。

それらが、学問としてどのように整理され記録され得るのか。エスノグラフィー的手法に対し、今回どう新しく、科学的記述とどう融合していくのか。メソドロジーの掘り下げと明確化が、カギを握るのではないかと思います。学問の本質にせまる研究フィールドだと思います。たいへん期待しております。

## 松浦健二(京都大学大学院 農学研究科 教授)

- ・消えゆくものを認識しましょうはいいけど、消えゆくものを救いましょうってだけで、単調な議論になる。
- ・守ろうとしてるんです！は、いいこちゃん論法になって、結果、何も言ってないことになる。この論文誌でユネスコの報告書書いてもしょうがない。
- ・一度、「消滅したっていいやん」という側からみて、徹底的に考えればいい。こういう見方がある、他方、こういう見方がある、こういうのもある、それでもこの部分がどうしても残る。こういう論法でないと、「言語そのものに価値があるからです。」っていったら、何にでもはてはまることになるよ。
- ・なぜ、自分はそれがのこったほうがいいのか、を深く掘り下げる。
- ・例えば、言語の多様性の真逆は、世界は一つ。国境もない。全部同じ。効率とてもいい。全部おなじだったら、通貨も、言葉もなにも、まったく壁や敷居がない。めっちゃ、いいんじゃない？ すばらしくない？ その視点から徹底的に考える。
- ・方言が共同体として強固なものになるってのなら、やはり世界が一つになるために言語が一つになったほうがいいんじゃないの？
- ・言語を超えた何かを得る、というのであれば、先のモンタージュの話と似ている。
- ・生きてる研究者にならなければならない。ここをふくらめたらいいと思った。
- ・主語をごまかさないとのは大事。

## 文字起こし・『といとうとい』編集委員

### コメントをうけての著者と編集委員との打ち合わせ

- ・思考実験もするのはするけど、鳥の人達と仲良くするとそういうのもういいじゃんってなる。外の人がやるものだって気持ちもある。当事者。
- ・最初から立場をとって取り組む研究。学問だって、そもそも立場がある。その態度をちゃんと学術に位置づけられるのを、求められているのかな？ それとももっと気持ちの部分をもっとだせやっといわれてるのか。
- ・「え？ そんなに大変なんだ！ 私の言葉！」って言って、実際に活動するのは、仕事の時間を減らしてまでやる活動なんだってことだし、はらくくらなあかんって。
- ・活動家と違うのは、学者は自分の中にもうひとつ目がある、自分は何をしてるのか、って考えていること。
- ・言語継承しなくてもいいって議論もある。それにかかるコストを考えたらしないひともいる。



- ・島の人9割は継承したい。1割は、しなくてもいい。
- ・日本語じゃなくて英語を公用にしたらいんじゃないかって議論もある。
- ・しもじみちのり、
- ・文献学をやりたいわけじゃない。生きてる人にこれはいえますか、いえませんか？とか直に聞いている。
- ・「生きてる研究者にならなければならない。」←すでになっているのだ。研究成果の還元っておもってるわけじゃない、こっちも想いをもって当事者としてやっている
- ・ありがためいわく笑
- ・コンセプトに共感してくれてるっていうか、私達研究者がくるから、「あの人達きてくれるから付き合うかw いいやつらだし」みたいな笑 それでいいのだ。むしろ、そうやって世の中がまわってきたのだ。
- ・人と人とでつながってる。島の人と研究者というのではなく。
- ・未来は前、過去は後ろ、それが逆の人もいる。パプアニューギニア。自分は川に乗ってる。過去はわかるから前、未来は見えないから後ろ。
- ・例：冷蔵庫の西にソースがある
- ・やらないことも影響を与えてる。

同じ言語記述のメンバーも、踏み込まないように記述するだけ。島の人にしたら、記述する価値はあるけど、残す価値はないっていうメッセージを与える。

じゃあ、自分はどっちをとるのか？ 私は残したいって気持ちがある。

客観的であることも影響を及ぼす。

- ・この島の人達は、他の島で何が起ってるか知らない。島の人達は、そこにいった研究者しか知らない。
- ・二泊三日できてさーっと帰ってく・・・これなんなの？って島のひとは思うだろうね。
- ・記述するひとたちはもちろん彼らなりに自分たちは正しいことやっている。活動家とは違う。という人もいる。
- ・研究者の態度、客観の主観のメッセージになる。いかに、あるべきか
- ・本当にアウトサイダーであるのは無理だろう。
- ・もうちょっと疑えよ、自分も。
- ・はらくくってるひとどうし、対話ができて、それこそが研鑽となる。むしろ、一緒にやったらいい。

文字起こし・『といとうとい』編集委員

# 戦う言葉

ー消滅危機言語の研究と実践ー

山田 真寛 国立国語研究所 言語変異研究領域

横山 晶子 東京外国語大学 アジアアフリカ言語文化研究所

現在、6000から8000あるとされる世界の言語は、その半分が「いま何もしなければ」今世紀中になくなってしまおうとされています。UNESCO の報告によると、そのような「消滅危機言語」が日本には8つあるとされていますが、島や集落ごとに異なるこれらの言語の下位方言を含めると、より膨大な言語が危機にさらされていると言えます。

直ちに気づくように「消滅危機言語」という単語においては、すでに価値感が含まれています。すなわち、消滅はよくないという前提があるということです。とある野生動物が絶滅寸前であると耳にすれば自ずと保護意識が芽生えるように、この消滅危機言語もまた保全されるべき、調査されるべき対象です、と言い切れればいいのですが、ことはより複雑です。

有史以来、人類はどの民族であろうが言葉ないしは言語について深い関心を持ってきました。古くを辿ればそれはギリシャ時代までさかのぼりますが、時代や社会状況によって、それは神と人との通信であったり（例：ヒンドゥー教におけるサンスクリット語研究、中世キリスト教のラテン語研究）、記号論の諸法則を言語に適用させようとしたり（例：フェルディナン・ド・ソシュール）、そして、言語間の差異を超えた思考形式を見出したりと（例：ノーム・チョムスキー）、今日まで探求が続いています。事実、言語学の領域としては、主に言語の本質を探るための「意味論」「語彙論（ごいろん）」「文法論」「文字論」「音韻論」などから成っている他、他の学問と融合した「比較言語学」や「言語地理学」など多岐にわたります。

改めて素朴に考えるなら、そもそも言語とは何でしょうか。「言語とは、完全なるコミュニケーション・ツールである」と断言するのはあまりに安易です。言語をまだ持たない赤子と母親の身体的接触を通じた密な意思疎通可能の事実、さらには長年連れ添った夫婦が目線や吐息で意思疎通できる事実。これらは言語によらずともコミュニケーションができる明らかな証拠ですし、むしろ言語よりも的確な情報伝達となっているとも言えます（ただしかなり濃い一対一関係に限定されるが）。

もちろん、言語は他者とのやりとりの一つであることは疑いようはありませんが、少し考えてみるならば、我々は言語（言葉）なしには何一つ考えることはできない存在であると気

づきます。いやいや、「思う」や「感じる」は言語以前のものじゃないかと思われた方もいるかと思いますが、心に何かそのようなものが湧いたとき・・・それを言葉にすることで意識下とし、自分自身でその何かを自覚するというのは我々にとってごく自然な行為でしょう。つまり、言葉にしてはじめて詳らかになるということです、やはり言葉なしには何一つ考えられない、となるのです。

ここで大事なものは三つ。一に、間違いなく言葉以前の何かの存在を認めていること（意味の存在）、二に、言葉にしたものが言葉以前の何かと一義的に確定しえないこと（言葉の限界）、三に、その言葉とは、一想像するしか手立てはないのですが一人間が意図して作ろうとして作った人工物ではなく自ずと生まれたもの、すなわち自然ないしは宇宙的な独自の存在であろう、という点です（普遍の証拠）。原始において言語というものは偶発的に生まれ、またそして偶発的に共同体を作り、その共同体により生きながらえてきました。胎児の段階からすでにしてその言語のシャワーを浴び、誕生後その成長に伴い空気のように自ずとその言語を使用してきた・・・言うまでもなく言語は身体的な存在であり、同意にて、身体は言語的な存在であるのです。

これは呑気に聞き流されるものではなく、別視点で言うなら、その言語共同体に生まれ落ちた身体は強制的にその言語の正しさのもとに在り、そこから抜け出すことは許されない。そのぐらい我々を支配しているものと言えます。事実、成人になってからの第二言語習得は、個々人の特性に依存するとはいえ、非常に苦勞することがよく知られていますが、これは、第一言語の文法構造や体系が思考フレームと強く相関していることが理由の一つでしょう。また、チェコスロバキア共和国にはこのようなことわざがあるそうです、"Mit jeder neu erlernten Sprache erwirbst du eine neue Seele"（新しい言語を学べば、あなたは新しい魂を獲得します）。

ようやく本題に踏み込みますが、ここで言語を「方言」と置き換えても成り立つことに意識を向けたいのです。上でも書いたように、消滅危機言語の研究は、絶滅危惧種保護と同じような多様性の確保や人間理解の手段喪失といった文脈で意味づけられることが多いですが、あえて「方言」の側から考えてみるなら、有限な身体になんとか息継いで無限たろうと言語が戦う営みに力を貸すこと、とも言えます。つまり、著者らは10年にわたり与那国島や沖永良部島をベースにその方言を継承する活動をやってきましたが（島でのワークショップや数多くのイベント、教育委員会との連携や絵本作りなど：参考文献リスト参照）、ある意味で「方言」が我々を動かしたとも言えるのです。

事実、その活動を通じて著者らが感じたのは、その方言がどんなに面白い現象に溢れており、まるで一人の人格と接してるようだ、ということ。数ある例から一つ選出するなら、沖永良部島のオノマトペ(擬音語・擬態語)では、「怒る」に「わじわじ(怒る)」、「柔らか」

に「びらびら(柔らかか)」等があります。ここで、サピア=ウォーフ仮説を持ち出し、いわゆる標準語にはない多種多様な表現方法には学ぶところが多い、と締めるのはいささか短絡的と考えます。その理由は、次の与那国島のこのことわざにあります。

”むぬい ばちたや、ちま ばちるん。ちま ばちたや、うや ばちるん。”

(ことば、忘れれば、島忘れる。島、忘れれば、親忘れる)

このように、方言は単なる個々人のアイデンティティに留まらず、それを使用する共同体とその歴史といった、個々人を越えた域での存在を感じさせてくれるものです。先に、言語は身体化され、身体は言語化されていると書きましたが、こと方言においては使用者からなる共同体の輪郭が明瞭なぶんだけ、より身体化が強化され、同時に、同じ共同体の身体同士との関係も強固なものになるのでしょう。そこに実在として在る普遍(言葉)は、残されなければならない対象などではなく、価値そのものなのです。したがって、消滅危機を回避することが本当の目的ではなく、むしろ消滅危機を回避しようとしてしまう努力こそに意味がある・・・それは、人間はどうせ死ぬのに生きようと生きているのと同じことで、在るといふ価値がそこに在り、その必然の動きとして存在を継続させてしまうことを自覚させてくれるからです。

肝心なところなので繰り返しますが、消滅危機言語を救うことが価値と言いたいものではありません。これまで消滅してしまった言語とて数多くありますし、この世に言語が一つだけなら、意思疎通がなんとスムーズにいくことでしょう。しかし、我々人類の歴史はそうさせなかった。それは、言語(および方言)もまたいずれ無となる一つの人格、もっと言うなら、よく生きようとする人格だからでしょう。

消滅危機言語の研究は、その終わりが現実になりつつあるという点において、通常の言語研究よりもいくらかより強く人格を意識させてくれます。もちろん、著者らも最初は学術研究としてフィールドに体入り、研究対象(←この4文字に傍点)として方言と接してきた過去を持ちます。しかし、言語研究、特に消滅危機言語研究というものが持つ特性は、人間あるいは歴史としての本質に迫るものゆえ、学術的成果を収めることで満足することを許しませんでした。方言(言語)という一つの宇宙を扱うためには、人と人との付き合い、人生の重なりこそがふさわしい、と思うようになったのです。

ここで関心を払いたいのは、学術研究の「立ち位置」です。科学哲学の偉人の言をもちだすまでもなく、突き詰めて考えれば、対象に対して影響を及ぼさない観察というものはない。消滅危機言語研究は文献学ではなく、生の人間から「○○を方言でなんと言いますか？」といったよう尋ね歩くフィールドワークです。尋ねられた側からすると、自分のコト

バに興味を持ってもらって嬉しいとなるか、あるいは、自分はまるで動物園の動物か、と思われるかもしれません。人間と人間が接するということは、その人生と人生、個別の歴史と歴史が接することであり、ましてや、（先に人格とまで言った）言語というものを扱う研究であるならなおのこと、「態度」というものが重要性を増します。それを己に問うた結果、我々著者らは、消滅言語の復興活動の実施に腹をくくったのでした。もちろん、すべての消滅危機言語研究者が復興活動せよと言っているわけではありません。辞書、辞典作りは間違いなく後世への資産となるでしょう。しかし、消滅危機言語に対して「調べるだけ」という態度は、それもまたメッセージになることに注意を払う必要があります。尋ねられた側は、「方言に関心はあっても、私たち（の人生）にはないのだな」となるでしょう。辞書、辞典作りもまた、それはそれで腹をくくる必要があるのです。言語そのものの生きた状態を扱う（研究する）ためにこそ、我々も生きた研究者にならなければならない。そう考えます。

問⑥

# 戦うことば： 消滅危機言語保存の研究と実践

山田真寛／横山晶子

問⑥

増え続けるチャットベースでの  
コミュニケーションに象徴されるように  
われわれの言語環境は激変しつつある。  
ただ「誰とでも通じる」利便性を追求することに  
どこか罪悪感があるのは、なぜなのだろう？  
奄美・沖縄で消滅危機言語の保存に携わる言語学者が  
活動の背景にある「戦い」を明らかにする。

山田真寛（国立国語研究所 言語変異研究領域 准教授）

2005年国際基督教大学卒業、2010年米国デラウェア大学大学院 言語学・認知科学研究科博士課程修了（Ph.D. in Linguistics）。2010年から与那国島、2015年から沖縄永良部島でフィールドワークを行い、「言語復興の港プロジェクト」を進めている。

横山晶子（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 特別研究員）

日本学術振興会特別研究員／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。2010年より沖縄永良部島にて言語調査を始める。危機言語の記述文法、言語記録、言語継承研究に取り組む。沖縄永良部島の面白いオノマトベを集めた絵本『シマトベ』の発行。ホームページ「しまむに宝箱」(<http://erabumuni.com>)にて、しまむに（沖縄永良部語）の教材、語彙データベース、動画などを公開中。

現在 6,000 から 8,000 あるとされる世界の言語は、約半数が「いま何もしなければ」今世紀中になくなってしまおうとされています。国際連合教育科学文化機関（UNESCO）は、日本にあるそのような「消滅危機言語」の数を 8（アイヌ語、八丈語、6つの琉球諸語）と報告していますが<sup>1</sup>、ほとんどの日本語本土諸方言や、さらに地域や集落ごとに異なるこれらの下位分類（方言）を含めると、より多くの言語が消滅の危機に瀕していると言えます。

考えてみれば、「消滅危機言語」という単語には、価値判断が含まれているかもしれません。すなわち、消滅はよくないという前提があるのではないのでしょうか。ある野生生物が絶滅寸前であると耳にすれば保護意識が芽生えるように、消滅危機言語もまた保全されるべき対象です……と言いきればよいのですが、ことはより複雑です。

### 言語とはどのようなものか

人類は言語について深い関心をもってきました。学問としても、古くはアリストテレスの論理学<sup>2</sup>やパーニニのサンスクリット文法学<sup>3</sup>、近現代ではソシュールの共時的言語研究<sup>4</sup>やチョムスキーの普遍文法研究<sup>5</sup>など、今日まで探求が続いています。現在の言語学の領域としては、言語そのものの構造を探る音韻論、

形態論、統語論などから、言語に関わる事象を探る社会言語学や応用言語学など多岐にわたります。

「言語とは何か」という問いは探求目的に応じて明確に定義されるべきですが、素朴に「言語とはどんな特徴があるか」と考えてみると、他者とのやりとりの一手段であることは確かなものの、「言語とは完全なコミュニケーションのツールである」と断言することはできません。赤ん坊と母親や、長年連れ添った老夫婦が言語を使わずに意思疎通できること、逆にことばでは伝えられない想いや、ことばにしたことで生まれる行き違いなどからもわかるように、「コミュニケーションに最適化された道具」とは安易には言えないのです。

### 身体は言語的な存在であり、

ある言語共同体のもとに生まれた子どもは、典型的な環境・発達のもとでは、その共同体の言語を獲得しないという選択はできません<sup>6</sup>。この点で言語を獲得するということは、例えば「自転車の乗り方（＝乗り方を覚えないう選択ができる）」ではなく「歩き方（＝歩き方を覚えないう選択ができない）」と同じような、人間の普遍的な特質です。この意味で私たちの身体は言語的な存在であると言えます。

Q.6

1. UNESCO, "Atlas of the World's Languages in Danger", UNESCO Publishing, 2011.

2. アリストテレス,『ニコマコス倫理学(上)』,高田三郎訳,岩波文庫,1971.

3. パーニニ,『古典梵語(サンスクリット)大文法—インド・パーニニ文典全訳』,吉町義雄訳,泰流社,1995.

4. フェルディナン・ド・ソシュール,『一般言語学講義』,小林英夫訳,岩波書店,1972.

5. ノーム・チョムスキー,『統語構造論』,福井直樹・辻子美保子訳,岩波文庫,2014.

6. スーザン・H. フォスター＝コーエン,『子供は言語をどう獲得するのか』,岩波書店,2001.



例えば、チェコスロバキア共和国にはこのようなことわざがあるそうです：“Mit jeder neu gelernten Sprache erwirbst du eine neue Seele”（新しい言語を学べば、あなたは新しい魂を獲得します）。このことわざは、第一言語（母語）とは習得過程が異なる第二言語においてもまた、私たちが言語的な存在であることを語っていると言えるのではないのでしょうか。

#### そして、言語は身体的な存在

言語は人間の普遍的な特質として獲得され、脳内の心的表示として個人の内に存在しています。したがって、ある言語の寿命は個人の寿命と同一になります。ある言語が消えるときは、その言語の「最後の話者」の命が消えるときであることからわかるでしょう。この意味で、言語は身体的な存在であると言えます。

しかし、言語は少しずつ変化しながらも、個人の寿命を超えて存在し続けることができます。これを可能にしているのが、言語の世代間継承<sup>7</sup>です。同じ言語を獲得した個人の集団は共同体を形成し、言語の世代間継承はまたそのつながりの維持にも貢献しています。この世代間継承が妨げられた状態が、言語が消滅の危機に瀕している状態ということです。

7. Masahiro Yamada, Yukinori Takubo, Shoichi Iwasaki, Celik Kenan, Soichiro Harada, Nobuko Kibe, Tyler Lau, Natsuko Nakagawa, Yuto Niinaga, Tomoyo Otsuki, et al. Experimental Study of Inter-language and Inter-generational Intelligibility: Methodology and Case Studies of Ryukyuan Languages. Japanese/Korean Linguistics, 2020, 26. p.249-260.

#### 戦う言語

消滅危機言語の研究は、絶滅危機種の保護と同じような、多様性の確保や人間理解の手段喪失といった文脈で意味付けられることも少なくありません。しかし別の観点、「言語の側」から考えてみれば、個人の寿命という有限性を持つ身体に息づきつつも、世代間継承によってなんとか無限に存在しようと言語が戦う営みに力を貸すこと、と考えることもできます。この意味で、筆者らが琉球諸島で行っている消滅危機言語研究、具体的には、世代間継承によって言語を維持・保存する研究は、言語によって動かされたもの、と言うこともできます。

言語は、人間の内に存在し個人が自身のアイデンティティとして認識しているものでありながらも、同じ言語を共有する共同体の歴史や智恵といった、個人を超えたものの存在を感じさせてくれるものでもあります。まさにこのことを伝える与那国語（沖縄県八重山郡与那国島）のことわざを紹介します。

「むぬい ばちたや ちま ばちるん（ことば 忘れたら 島 忘れる）。ちま ばちたや うや ばちるん（島 忘れたら 親 忘れる）。」

琉球の多くの地域で親や年長者、先祖は、現



在の自分を支える人たちとしてとても大切にされています（余談になりますが沖永良部語〔鹿児島県大島郡沖永良部島〕の「うやほ」という語は、生きていた年寄と生きていない先祖どちらも指します）。紹介した与那国語のことわざは、「むぬい（島のことば）」の喪失は「ちま（島）」すなわち故郷・同じ言語を共有する共同体、そして「うや（親）」すなわち年長者・先祖が紡いできた歴史や知恵の喪失につながる、と解釈することができるでしょう。

#### その言語を話す人のことを思う

このように、「言語の側」という観点は、「その言語を獲得した個人やその言語を共有する共同体の側」という観点とやはり切り離すことはできません。すると、多様性の保持や人間理解の手段喪失のような外的な圧力ではなく、自分たちの言語は価値そのものであるという認識を通して言語の消滅危機を考えることが自然にできるのではないのでしょうか。

これまで消滅してしまった言語は数多くありますし、この世に言語が一つだけなら、意思疎通はスムーズにいき、世界は一つになって争いが減ったりするかもしれません。しかし人類の歴史はそうさせませんでした。ある程度の範囲では同質集団のつながりを求めつつ、それ以上の範囲では他との差異を求め

人間にとって自然なことが、言語にもまた起こっているようにも見えます。この点でも、「言語」と「言語コミュニティとしての人間」を重ねて考えると腑に落ちるのではないのでしょうか。

先に、筆者らが行っている消滅危機言語の継承研究は、言語によって動かされたもの、と言いましたが、同時に言語コミュニティによって動かされたものと言うことができます。そして、言語は身体的であるとは、言語はその言語を話す人であると言い換えることも、それほど乱暴なことではないように思います。先に触れた、ある言語が消えるときはその言語の「最後の話者」の命が消えるとき、ということからも。

#### 言語コミュニティと学術研究

言語の継承保存は、言語コミュニティメンバーひとり一人の取り組みが不可欠です。その言語の話者は若い世代へのインプットをできるだけ増やし、若い世代はとにかく言語を習得し、子どもたちがその言語を獲得する環境をつくらなくてははいけません。保全する対象は言語ですが、それは言語コミュニティメンバーの内に存在するものであり、実際に保全を達成させるのもまた言語コミュニティメンバーです。つまり、言語の戦いに力を貸すことは、言語コミュニティの戦いに力を貸

Q.6

すことといえます。研究者個人ができることは非常に限られているなかで、筆者らが沖永良部島〔鹿児島県大島郡和泊町・知名町〕で実施している活動<sup>8</sup>やその研究態度について以下に述べます。

### 沖永良部島で行っていること

消滅危機言語の研究者が行うべきことの一つは、琉球語の文法現象を記述すること、つまり（人間から切り離れた）言語の構造を記述することであり、筆者らも当初はそのために沖永良部島にやってきたのです。しかし、町の文化ホールで行われる全島規模のイベントから、一集落の公民館で自主開催するものまで、数か月に一度のフィールドワークのたびにほぼ毎回実施する研究発表を通じ、言語を研究するということは言語コミュニティと対峙すること……。そう深く感受するようになり、島の人たちは博物館に残すような言語の記録保存ではなく、世代間継承によって生きた言語を残す継承保存を望んでいることが肌感覚としてわかりました。

最初は上述のトークやワークショップに、「わざわざ東京から通ってきている友だち（筆者らのこと）がやっつることだから」とか、「そんなふうにする友だちに誘われたから」という理由で参加する人が多いと思っています。筆者らもやはり「友だち」として、畑の草引

きや川掃除、地域行事の準備や後片付けを手伝ったりしていますが、このようなこと以外に「研究者の友だち」として何をすべきなのでしょう。

### 学術研究としての言語継承保存活動

言語研究者は、博物館に残す文法記述や辞書、音声や動画などの言語資料をつくる専門的な知識と技術を持っており、島の人たちへの感謝の気持ちは、この知識と技術を島のことばの継承保存に活用することで具現されると考えます。言うなら、言語研究者がリソースの一つとして使われることです。

この考えに基づき、単発のトーク・ワークショップや定期的な公民館講座で、言語の記録や継承に役立つ知識と技術を島の人たちが身につけるサポートをしたり、モチベーションの維持や「楽しさ」のため、島のことばの絵本をつくったりしています。これらは「学術成果の還元」とか「アウトリーチ」などの社会貢献として理解されることもありますが（筆者らも文脈に応じてそんなふう言うこともありますが）、言語の継承保存という研究目的にとって最適なことだと判断します。既存の学術的活動を超えることかもしれませんが、研究者も島の人たちも、消滅危機言語の継承保存というプロジェクト——言語の戦い——の参加者であり、それぞれが最も効果的

## 問⑥

8. 山田真寛(国立国語研究所), プロジェクト「言語復興の港」



に機能するために必要なことが、「学術成果の還元」というかたちを取っているのだと思います。研究者として、そして生きた人間として、これが最適解だと考えています。

消滅危機言語研究は文献学ではなく、生きた人間から「〇〇〇は、方言でどう言いますか?」「この文脈で×××と言うことはできますか?」とひたすら質問し続けることでデータを収集するフィールドワークです。このとき、文法記述に(だけ)注力していた初期の筆者らのように、言語を人と切り離して言語そのものの構造や体系を記述することに専念するのか、それとも自然科学的なアプローチから逸脱し、「この言語を残すことに価値がある」という価値判断を認めて継承保存活動に(も)取り組むのか……。

これまで述べてきたように、言語研究、特に消滅危機言語研究においてはなおさら、「言語」と「その言語を話す人たち」を切り離すことができません。それは、再三繰り返しているように、ある言語が消えるとは、その言語の「最後の話者」の命が消えることですから。参照文法の執筆や大きな辞典の制作は、片手間ですることではありません。しかし、人と関わる研究者として、何かを「やらないこと」が持つメッセージもまたあります。例えば、文法記述にだけ注力するとき、データ提供者である言語コミュニティメンバーは「こ

の人は私たちのことばには興味があるけど、私たち(の人生)には興味がないんだな」と認識されることにも自覚的になる必要があるのではないのでしょうか。言語の記録保存と継承保存は一人の研究者が両方行うことが難しいだけで、筆者らが言語コミュニティと共同作戦を展開しているように、記録保存を行う研究者と継承保存を行う研究者もまた協働することが、これからの消滅危機言語研究に求められていることだと考えます。

消滅危機言語の研究とは、人間の存在と真正面から対峙することであり、研究者が継承保存活動をするしないに関わらず、研究者として、人間として、覚悟を決め腹をくくってやること。つまるところ、私たち研究者はひとしく、ことばの戦いの参加者である。そのように考えます。

Q.6



カジキ漁を営む漁師の取材を行なったときに、沖合から望んだ与那国島。崖の上にたつ西塔灯台は日本最西端に位置する灯台で、琉球政府が建設し60年以上の歴史がある。(撮影：森澤ケン)

### パトリック・ハインリッヒ

ヴェネツィア・カフオスカリ大学 准教授

近代化の過程で、人間は言語に大きく介入しました。言語を自然現象としてではなく、コミュニケーションのニーズの変化に合わせて人間が適応させた人工物であると捉える必要があります。それではなぜ、絶滅の危機に瀕した言語を守ることは、その言語が話されている地域住民の責任なのでしょうか？ 絶滅をもたらす決定的なダメージは、外部の人間がもたらしました。問題を解決すべきは誰なのでしょうか？

### パトリック・ハインリッヒ

1968年生まれ。社会言語学・危機言語記録保存が専門。ハインリヒ・ハイネ大学(文学修士)、ゲルハルト・メルカトル大学(文学博士)、獨協大学外国語学部を経て、2014年から現職。編著書に「琉球諸語の保持を目指して」(ココ出版, 2014)、「Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics」(Routledge, 2019) などがある。

## 「戦う責任」の所在



牛飼いの大嵩聖吾さんは、高校卒業後1年東京で働いたのちに島に戻った。現在は家族とともに与那国島で暮らす。牛小屋があるのは先祖代々の土地で、与那国語の土地名を今も使っている。(撮影：森澤ケン)



幼稚園教諭の與那覇悦子さんは、あるとき「子どもたちが島のことばをわからないのは、自分たちが使わないからだ」と気づいた。今では幼稚園の活動に島のことばと文化を積極的に取り入れている。(撮影：森澤ケン)



解体業を営む照屋幸吉さんは、もともと沖縄本島の生まれ。15年間アルゼンチンに移住したのちに、旅行してきた与那国島に移住を決意した。移住の際は、カバンひとつだったという。(撮影：森澤ケン)

### 山田真寛／横山晶子

言語が“自殺”することはありません。奄美・沖縄の場合には、明治時代以降の標準語教育や、進学・就学のために標準語が必要という外圧がありました。政策的、社会的に多言語を認めるようになることは日本社会が果たすべき1つの責任だと考えます。一方で、地域住民が主体的にならない限り、言語は継承されません。“自分たちの言語”と向き合った地域住民が、本当に言語の継承を望むとき、研究者はそれに出るだけの力を貸すべきだと考えます。

## 逆転しても残る価値を探す

山田真寛／横山晶子

言語は集団帰属意識、集団結束力、差異標示という集団のアイデンティティに関わるものです。そこに、言語の多様性と文化的多様性の接点があり、守らなければならない理由にも繋がると考えます。事実、言語変化は必ずしも標準化に向かう訳ではありません。ピーター・トラッドギルの『言語と社会』では、ニューイングランドのマーサズ・ヴィニヤード島で島外から行楽客が流入した結果、社会的な変化を嫌う島民が外部の人とは違う存在であることを示すために“島固有の”発音を広げた例が紹介されています。

松浦健二

京都大学 農学研究所 教授

「言語を守らなければならない」という前提があると単純な議論になるように感じた。何にでも価値はある。一度、「言語は消滅してもいい（＝世界中で一つの言語を使う）」という側からみて、徹底的に考えてみたらどうなるか。それでも、どうしても残る部分というのが守らなければならない理由になりうると思う。



東迎高健さんは、サトウキビ農家を営みながら町議員などをつとめた。配偶者の東迎八四子さんは、もともと自宅の裏で食堂を営んでいた。現在はつくった野菜を子や孫に送っている。（撮影：森澤ケン）

## 言語認識と人間

山田真寛／横山晶子

空間参照枠という例があります。日本語や英語は、ものを示すときに「東・西」などの絶対的な位置表示も「右・左」などの相対的な位置表示もあります。しかし、東インドネシアのラマホロット語には「山・海・天・地」を基準とした絶対的な位置表示ではなく「イスから見て山側の机」とか「娘は道の海側にいる」などと表現します。言語の枠組みと空間認識が密接に関連している例と言えます。多言語を話すことは、その異なる世界の見え方を渡り歩く営みと言えるでしょう。

古谷紳太郎

東京工業大学 リベラルアーツ研究教育院 特別研究員

多言語話者の認識がいかなるものなのかについては、まだ明確な答えがないように思います。Lost in translation（翻訳不可能性）というのは、単に異なる言語が一对一対応しないということに過ぎません。各言語が人間をどのように支配しているかどうかについては、別途詳細な議論が必要だと思いました。

本テキストに関するレビューおよび対話の過程は下記のレボジトリに公開されています。



### 利便性とノスタルジーの超克

少数言語をめぐる問題はつねに、「コミュニケーションツールとしての価値」と向き合いつづけてきた。英語は、インターネットなどのテクノロジーにより記述された情報が飛躍的に増え、グローバル化した世界での共有語となりつつある。結果として、世界の教育の現場で扱われることが多くなっている。たとえば4種の公用語をもつスイスでは、自国の言語よりも英語が優先して教えられることが多くなってきており、論争を呼んでいる。

また、日本にひるがえって考えてみても、明治以降「標準語」とよばれる共通語がラジオなどのメディアを通じて普及してきた。江戸時代には、東北の藩と九州の藩では会話が成立しなかったという文献も残っており、日本全体で保たれていた方言の多様性は本論でも指摘されている通り、薄まっていったのが実情だ。この問題は、言語の問題のみならず、社会全体がもつ過疎化・都心一極集中などの問題と不可分である。

### 問⑥

ただ、英語に象徴される「利便性」に対して、少数言語を保全するための「お題目」はどうしてもノスタルジックなものになりがちである。本論では山田・横山の研究者としての内側がさらけだされているが、研究としてそこに提供する価値を定義すること自体が大きな問いを内包しているように思える。

それは、山田・横山の論において、「営み」というキーワードに象徴される。世代を超えて受け継がれてきた言葉は、その場所で脈々と続けられてきた生活そのものであり、生きてきた人々の結晶ともいえる。そこに介入することで、研究者は目の前の話者だけでなく、これまでそこで生きてきた人間たちの歴史（人生）にも触れることになる。だからこそ、山田、横山らの消滅危機言語の研究は、「研究」というより「営み」に近づいたのだ。

確かに、今日的学術界の文脈では、それが「アウトリーチ」と称されるかもしれない。が、本論でも述べられているように、それは消滅危機言語の研究としての自然な営みであり、既存の学術的活動を超えたところの生き方としての研究活動になったのだ。消滅危機言語の研究とは、研究者に覚悟を求める性質をもつかもしれない。

文・『といとうとい』編集委員